

各関係機関団体の長
各病虫害防除員 } 殿

福岡県農林業総合試験場長
(福岡県病虫害防除所)

令和2年度病虫害発生予報第2号(5月)について

このことについて、病虫害発生予報第2号を発表したので送付します。

予報第2号

<予想される向こう1か月の天候(令和2年4月25日~令和2年5月24日)>

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

天気は数日の周期で変わり、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

向こう1か月の平均気温は、平年並または高い確率ともに40%です。

週別の気温は、1週目は低い確率60%です。2週目は高い確率60%です。3~4週目は、平年並または高い確率ともに40%です。

向こう1か月の気温・降水量・日照時間(数値は予想される出現確率)

項目	平均気温	降水量	日照時間
九州北部地方	低20 並40 高40% やや高い見込み	少40 並30 多30% 平年並かやや少ない見込み	少30 並30 多40% 平年並かやや多い見込み

(福岡管区気象台 令和2年4月23日発表抜粋)

5月における主な病虫害の発生動向は、次のように予想されます。

作物名	病虫害名	現況 (発生量)	5月の発生予報 (発生量)	
		平年比	平年比	前年比
カンキツ	そうか病 ミカンハダニ	並 やや少	並 やや少	並 並
ナシ	黒星病 赤星病	やや多 やや少	やや多 並	やや多 やや多
カキ	フジコナカイガラムシ	並	並	並
果樹共通	チャバネアオカメムシ	—	多(前年比)	
茶	カンザワハダニ チャノキイロアザミウマ チャノミドリヒメヨコバイ チャトゲコナジラミ	少 少 やや少 やや多	やや少 やや少 並 やや多	やや多 やや多 並 やや多

*果樹共通・チャバネアオカメムシの予報は前年比としている

【果樹：かんきつ】

1 そうか病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 4月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

発病葉率 0.3% (平年 0.2%、前年 0.2%)

発生ほ場率 27.3% (平年 14.0%、前年 10.0%)

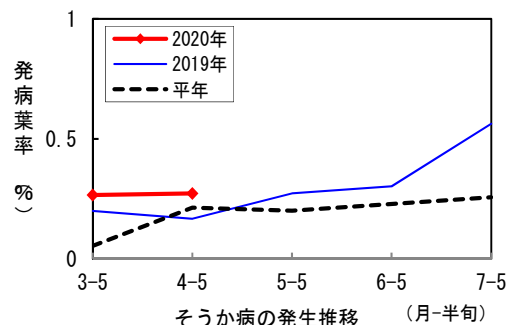
イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている(±)。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 発芽直後～展葉期の薬剤防除を徹底し、初期発病を抑える。

イ 罹病葉は伝染源になるので除去する。薬剤抵抗性が発達しやすいので、同一薬剤の連用を避ける。

ウ 農薬の使用及び散布等にあたっては、p7の内容を確認の上、適切に実施する(以下の病害虫についても同様)。



2 ミカンハダニ

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少、前年並

(2) 予報の根拠

ア 4月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった(-)。

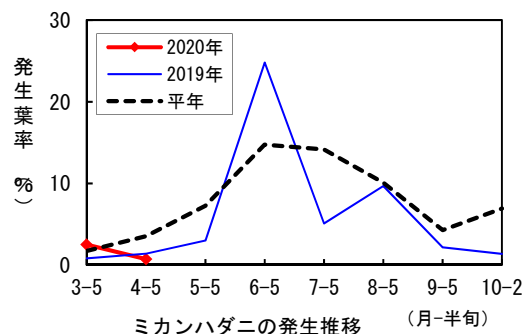
発生葉率 0.7% (平年 3.5%、前年 1.4%)

発生ほ場率 27.3% (平年 35.6%、前年 30.0%)

イ 向こう1か月の気象予報では、やや多の条件となっている(±～+)。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 薬剤抵抗性が発達しやすいので、同一薬剤の連用を避ける。



【果樹：なし】

1 黒星病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多

(2) 予報の根拠

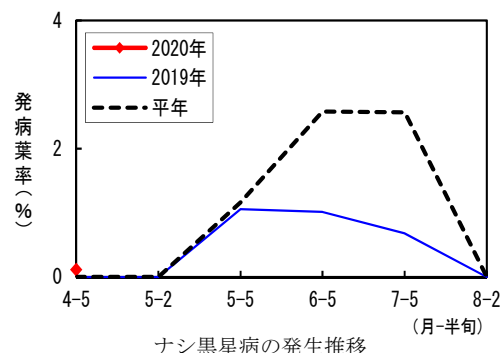
ア 4月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや多かった(±～+)。

発病葉率 0.1% (平年 0.0%、前年 0.0%)

発病花叢率 8.1% (平年 0.6%、前年 0.1%)

発病ほ場率 36.4% (平年 34.7%、前年 10.0%)

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている(±)。



(3) 防除上注意すべき事項

- ア 伝染源となる罹病葉や罹病果は、見つけ次第園外に持ち出し処分する。
- イ 薬剤感受性の低下をさけるため、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。
- ウ 薬剤防除にDMI剤（FRACコード:3）やQoI剤（FRACコード:11）を用いる場合は、薬剤耐性菌の発生リスク低減のため、DMI剤の使用回数は年間で3回以内、QoI剤は2回以内にとどめる。特に、DMI剤を用いる場合は、保護殺菌剤との混用により防除効果の維持が期待できる。
 - <詳細は、県ホームページ掲載の「令和2年度版病害虫雑草防除の手引き」-「防除方法の試験研究成果等」-「果樹」-「IV ナシ黒星病菌のDMI 剤感受性とDMI 剤と保護殺菌剤の混用効果」を参照>
 - https://www.pref.fukuoka.lg.jp/uploaded/life/388294_54433726_misc.pdf

2 赤星病

(1) 予報の内容

発生量：平年並、前年よりやや多

(2) 予報の根拠

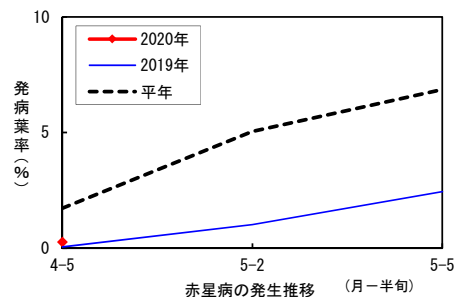
ア 4月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少かった（-〜±）。

発病葉率 0.3%（平年 1.7%、前年 0.1%）

発生ほ場率 63.9%（平年 30.9%、前年 20.0%）

イ 4月2半旬の県下3地点のナシ園周辺ビャクシン

における、小生子の飛散ピーク（ナシ赤星病菌冬孢子堆の成熟度60程度の時期）は前年よりやや遅く、4月5半旬でも飛散は終了していない（+）。



ビャクシン上のナシ赤星病菌冬孢子堆の成熟状況の推移（水浸法）

調査地点	調査時期	2020年		2019年		2018年	
		月-半旬	膨潤率(%)	成熟度	膨潤率(%)	成熟度	膨潤率(%)
朝倉市	3-3	13	3	13	3	7	5
	3-5	78	27	30	8	7	2
	4-2	69	27	91	53	100	80
	4-5	100	80	-	-	-	-
八女市	3-3	5	1	6	1	0	0
	3-5	74	30	14	4	19	5
	4-2	97	50	88	61	100	84
	4-5	100	79	-	-	-	-
筑紫野市	3-3	18	4	22	6	16	13
	3-5	57	24	42	11	14	4
	4-2	93	53	100	70	-	-
	4-5	100	87	-	-	-	-
平均 (3地点)	3-3	12	3	14	4	8	6
	3-5	70	27	29	7	13	4
	4-2	86	43	93	62	100	82
	4-5	100	82	-	-	-	-
(参考) うきは市	3-5	93	36	-	-	-	-
	4-5	100	70	-	-	-	-

注1) ビャクシン上の冬孢子堆を水に30分浸漬し、膨潤程度を、A：冬孢子堆が外観的に完全に膨潤、B：一部が未膨潤、C：約50%未膨潤、D：一部膨潤、E：全く膨潤していないの5段階で評価後、膨潤率と成熟度を下記の式により算出

注2) 膨潤率 = (A + B + C + D) / 孢子堆数 × 100

注3) 成熟度 = {(4A + 3B + 2C + 1D) / (4 × 孢子堆数)} × 100

注4) -は未調査

ウ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている（±〜+）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 今年のビャクシンからの小生子の飛散ピーク時期は、4月3半旬頃と考えられた。

イ ビャクシン上に冬孢子堆が残っている場合があるため、週間天気予報で降雨日を把握し、適期防除に努める。

【果樹：かき】

1 フジコナカイガラムシ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 4月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

発生枝率 1.4% (平年 2.2%、前年 1.7%)

発生ほ場率 36.4% (平年 47.6%、前年 18.2%)

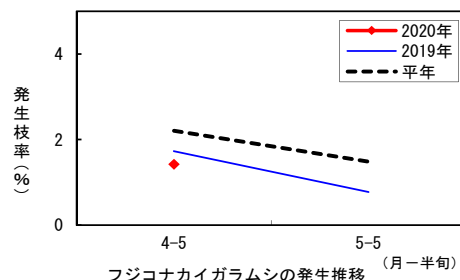
イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている(±～+)。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 天敵への影響が比較的少ない薬剤で防除する。

<詳細は、県ホームページ掲載の「令和2年度版病害虫・雑草防除の手引き」-「防除方法の試験研究成果等」-「果樹」-「X フジコナカイガラムシの発生生態と防除対策」を参照>

https://www.pref.fukuoka.lg.jp/uploaded/life/388294_54433726_misc.pdf



【果樹共通：チャバネアオカメムシ】

(1) 予報の内容

発生量：前年より多(2018、2014年並)

(2) 予報の根拠

ア 県下31地点の常緑広葉樹林下落葉中における1㎡当たりの越冬虫数は5.0頭/㎡で、前年(0.8頭/㎡)より多く(+)、2018年(3.8頭/㎡)、2014年(4.8頭/㎡)並であった(表1)。

イ 4月1半旬～4月4半旬までのフェロモントラップによる成虫誘殺数は前年並で(±)、2018、2014年よりやや少なかった。

誘殺数 0頭(前年 0頭、2018年 23頭、2014年 3頭) <筑紫野市>

0頭(前年 0頭、2018年 0頭、2014年 0頭) <宗像市>

0頭(前年 0頭、2018年 9頭、2014年 0頭) <うきは市、4月3半旬まで>

ウ 4月1半旬～4月4半旬までの予察灯による成虫誘殺虫数は前年並で(±)、2018年よりやや少なく、2014年並であった。

誘殺数 0頭(前年 0頭、2018年 4頭、2014年 1頭) <筑紫野市>

0頭(前年 0頭、2018年 0頭、2014年 0頭) <久留米市、4月3半旬まで>

2頭(前年 0頭、2018年 0頭、2014年 0頭) <うきは市>

0頭(前年 0頭、2018年 5頭、2014年 0頭) <八女市>

0頭(前年 0頭、2018年 1頭、2014年 0頭) <飯塚市>

*イ・ウについては、越冬量が多かった2018年と2014年を、参考値として記載。

エ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている(±～+)。

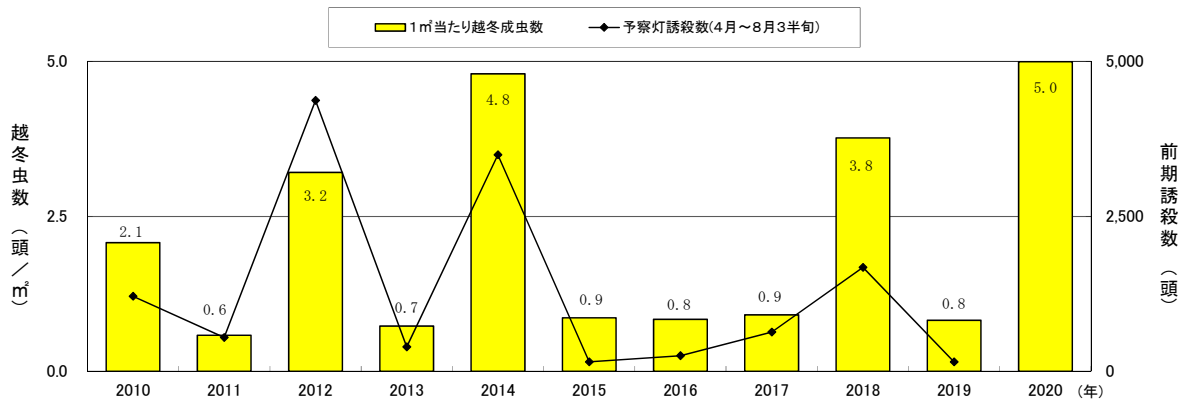
(3) 防除上注意すべき事項

ア 4月の気温が低く経過したため、予察灯やフェロモントラップでの誘殺数が少ないが、越冬虫数が多いので4～8月のウメ、モモ、スモモ、ナシ等の果実被害は、昨年より多いと予想される。

イ チャバネアオカメムシは夜温が高くなると活動が活発になるので、気温の推移と予察灯やフェロモントラップでの誘殺数が増加する時期と量に留意し、果樹園への飛来状況の把握に努める。なお、把握のための観察は一部の樹だけではなく、園全体の樹について行う。

ウ トラップ類での誘殺数や果樹園への飛来が多い場合は、収穫前日数等農薬使用基準を遵守して薬剤防除を行う。

エ 今後の発生状況については、病害虫防除所ホームページ (<http://www.jppn.ne.jp/fukuoka/>) を参照する。



チャバネアオカメムシの1㎡当たり越冬成虫数と、予察灯による4月1半旬～8月3半旬の誘殺数の年次推移

注) 予察灯による誘殺数は、県下6カ所平均。

【茶】

1 カンザワハダニ

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少、前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 4月5半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった(－)。

発生葉率 1.3% (平年 5.0%、前年 2.7%)

50葉当たり虫数 2.2頭 (平年 13.0頭、前年 6.8頭)

発生ほ場率 50.0% (平年 40.5%、前年 50.0%)

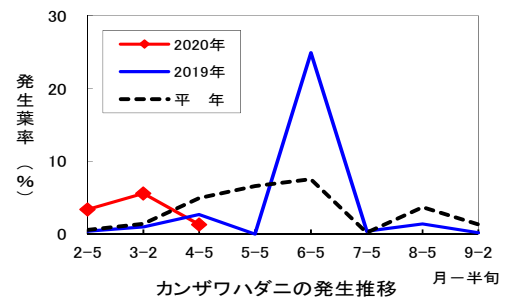
イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている(±～+)。

(3) 防除上の注意

ア 発生状況をよく観察し、発生葉率が2%以上の場合は、効果の高い薬剤で速やかに防除を行う。

イ 農薬の散布にあたっては、裾葉や葉裏に薬液が十分かかるよう丁寧に散布する。

ウ 同一系統薬剤の連続散布を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



カンザワハダニの発生推移

2 チャノキイロアザミウマ

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少、前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 4月5半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった(－)。

たたき落とし虫数 0.2頭 (平年 0.6頭、前年 0頭)

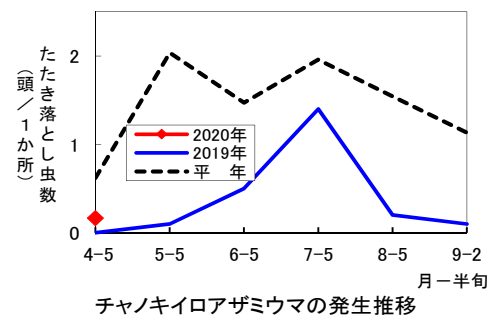
発生ほ場率 16.7% (平年 38.0%、前年 0%)

イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている(±～+)。

(3) 防除上の注意

ア 発生状況に注意し、B5判板上のたたき落とし法で、10頭以上見られる場合は防除を行う。

イ 二番茶の萌芽から開葉期を重点に防除する。



チャノキイロアザミウマの発生推移

3 チャノミドリヒメヨコバイ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 4月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった（－～±）。

たたき落とし虫数 0.0頭（平年 0.1頭、前年 0.1頭）

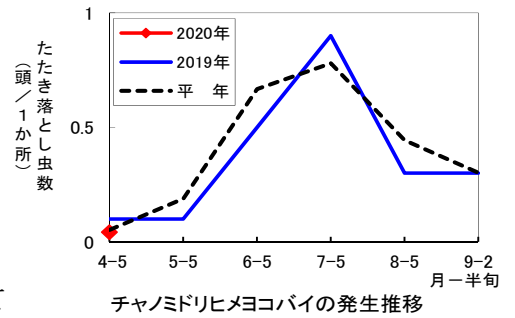
発生ほ場率 16.7%（平年 13.0%、前年 33.3%）

イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている（±～＋）。

(3) 防除上の注意

ア 発生状況に注意し、B5判板上のたたき落とし法で、4頭以上見られる場合は防除を行う。

イ 一番茶摘採後、又は二番茶の萌芽から開葉期を重点に防除する。



4 チャトゲコナジラミ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 4月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや多かった（±～＋）。

発生葉率 8.3%（平年 4.3%、前年 11.0%）

発生ほ場率 83.3%（平年 59.4%、前年 83.3%）

イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている（±～＋）。

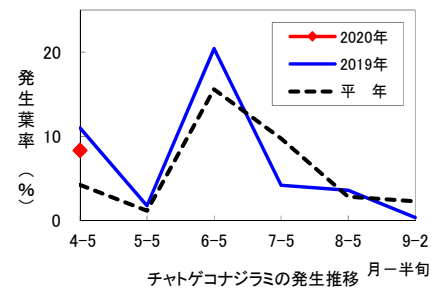
(3) 防除上の注意

ア チャトゲコナジラミは年3～4回発生する。

防除適期は若齢幼虫発生期で、第一世代幼虫の防除適期は、平坦地では5月中旬頃、山間地では5月下旬頃である。

イ 発生状況に注意し、B5判板上のたたき落とし法で、10頭以上見られる場合は防除を行う。

ウ 幼虫は葉裏に発生しているので、農薬の散布にあたっては、葉裏に薬液が十分にかかるように丁寧に散布する。



農薬の安全・適正使用、飛散防止対策の徹底を！

福岡県では、農薬の安全かつ適正な使用及び保管管理、使用現場における周辺への配慮を周知徹底するとともに、農薬による事故防止を目的として、安全使用講習会の開催や啓発チラシの配布等に関係機関、団体と一体となって取り組んでいます。

使用者の安全はもちろん、人畜・隣接作物・河川等への配慮について、ご指導をお願いします。

1 農薬適正使用の徹底

○適用作物、使用量や濃度、使用時期、総使用回数などが記載されたラベルをよく確認し、使用基準を遵守する。

※農薬の種類によっては、登録の内容がメーカーによって異なるので、ラベルをよく確認する。

(例：スミチオン水和剤40は、メーカーによって適用作物名や適用病害虫名が異なる)

○有効期限切れの農薬は使用せずに、産業廃棄物として処分する。

2 飛散防止対策の徹底

○風の弱い時に散布する。

○風向、散布方向、散布時間、散布圧などに留意する。

○飛散しにくい農薬（剤型）や飛散が少ないドリフト低減ノズルを使用する。

○散布ほ場周辺の収穫前の作物には十分注意する。

3 保護具の着用

○農薬の散布時には、ラベルの注意・警告マークをよく確認し、マスク、保護メガネ、ゴム手袋等を着用する。

4 農薬の散布後は、必ず散布器具を洗浄

○噴霧器、薬液タンク、ホースなどの散布器具を十分に洗浄する。

5 防除履歴の記帳

○農薬の散布が終わったら、作物名、ほ場の場所、使用年月日、薬剤名、使用濃度、使用量等を正確に記帳する。

6 空容器の処分

○空容器は、産業廃棄物処理業者に委託するなど、適切な処分を行う。

また、野焼きは法令で禁止されているので行わない。

福岡県病害虫防除所ではQRコードを作成しています。携帯電話のQRコードリーダーでスキャンして頂くと、病害虫防除所ホームページに簡単にアクセスできますので、御利用下さい。



最新の病害虫発生状況